

実践記録

133

シリーズ

地区コミュニティ協議会との連携事業「濁川地区コミュニティART」

新潟市北地区公民館長 佐藤 晴夫



開催日当日、ワークショップで賑わう会場風景

はじめに

平成19年度から新潟市の公民館では、各小学校区に結成された地域コミュニティ協議会との連携が公民館活動の大きなテーマとなりました。はじめてとっていい事業です。そこで19年度は、当館が地域コミュニティ協議会を所管している北区役所の政策企画課に呼びかけ、職員同士によるプロジェクトチームを結成し、地域コミュニティ協議会と公民館の連携の具体的な手立てを探ることにしました。そこから、平成20年度は公民館として事業を展開しました。それがこのたびご紹介する「濁川地区コミュニティART」です。



ワークショップで企画プランをつくる実行委員会メンバー

1. ARTを地域づくりに導入した理由

ARTが地域興しなどに導入されていく姿には歴史がありますが、意外なことに芸術家たちからのニーズが高いことです。それは日常生活から隔絶されがちな芸術作品を日常生活に持ち込み、ごく身近なところから表現行為を問い直し、あらためて社会との結びつきを深めたいということです。このことは、地域が今日の時代性や地域ニーズに応じた地域創造を図ろうとしたとき、ARTの

持つ創造力や想像力がその意図にうまく合致するからでしょう。理屈はともかく、予想もしない刺激を求め、若い世代をはじめとするいろいろな世代が参加できる地域づくりを目指しました。

2. 地域に呼びかけて実行委員会を結成

連携相手は濁川地区コミュニティ協議会です。また、アートプランナーとして新潟大学教育学部の丹治嘉彦准教授とそのゼミ生に依頼しました。

さて、濁川地区は阿賀野川下流右岸の農村地帯であり、そこに大きな2つの新興住宅地があります。人口は8,000人ほどです。コミュニティARTを展開するにあたって、協議会の文教部員6人を主体に実行委員会を組織しました。一般の地域住民からも公募し、入会者は合計で30人。そこに大学のゼミ生が参加し、全体で40人ほどになりました。



とまとドームを組み立てる

3. 「コミュニティART」の活動は白紙から

「濁川地区コミュニティART実行委員会」の活動は、まったくの白紙で事業を企画立案するところから始めました。実行委員会を6人構成5班に分け、ワークショップを6回展開しました。濁川地区の現状把握、そこからの事業テーマを探し、テーマに基づき企画プランづくりを実施しました。各班が競い議論し、これに大学サイドが参加したので、ガチンコバトルが展開していきました。「なぜARTなんだ」から、企画立案の選択、大学サイドの詳細プランにまで及びました。**最終的に決定したのが「とまと村」でした。**濁川地区の特産であるトマトをテーマに、濁川地区の旧住民と新住民(新興住宅地)のコミュニケーションを深めようという計画です。

開催日は11月2日(日)、会場を濁川中学校グラウンド。濁川中学校文化祭とジョイントし、約300人が参加して地区の交流を深めたものです。

おわりに

今回の事業は3年計画で進める予定です。今回はウォーミングアップとしました。当館のネライどおりとれない場面が多々ありました。しかし、若い世代をはじめ、地域の多くの皆さんが参加してくれたことが大収穫でした。